

「物のいのち」へのつつしみ

昭和における最高の宮大工といわれ、祖父から三代にわたって法隆寺の修復にたずさわってこられた西岡常一さんは、祖父のころから自分たちは、「木は二度生きる」と信じてきたという。例えば樹齢二千年の山の立木が切り出されて、お堂やお宮に第二の生の場所を得た場合、その木はおなじ二千年、あるいはそれ以上の年月にわたって建物を支えて生き続けてくれる、そう信じてきた。もちろんそのためには切り出された立木について、細心の心配りが要るのは当然だが、木にはそれに応えてくれるいのちがある。そのいのちを信じ、それを守ることが宮大工の唯一のつとめだという。

現に法隆寺のヒノキは建立されて千三百年、いまだに生きている。それは昭和の大修理のときわかったのだが、隅垂木や尾垂木など、軒を支えているヒノキが、屋根の重みでかなり曲がって垂れ下がっていた。ところが瓦や屋根土を降ろしたところ、その曲がった垂木が二、三日のうちに曲りもどって元の姿になったという。

ヒノキは生きている。しかも西岡さんの言によれば、「人間なら壮年の働き盛りの姿で生きている」。西岡さんはその経験から次のように書いている。

「わたしは法隆寺の解体修理のとき、樹齢二千年のヒノキが千三百年の間、法隆寺を支えて来て、いまもおそれぞれの持ち場で役割を果たしているのを見て、木のいのちの尊厳にうたれました。それは神としか思えません。

台湾で、二千年ものヒノキを立木で見たときもそうでした。ときの流れを枯れた色に変えて、樹齢にふさわしい風格と重味が、枝にも葉にもにじみ出ていました。わたしはこういう木に向かうときは一心に拝みます。

『宮大工の良心に誓って、そのいのちを殺すようなことはいたしません』と。

そのあとでわたしはノミやカンナをあてることにしております」『法隆寺を支えた木』

宮大工の良心に誓って、そのいのちを殺すこととはしないという言葉は美しい。このような言葉にふれていると、日本の長い文化伝統の急所は、物のいのちに対する敬虔さと驚くべき敏感さにあるとわがわがわかるのである。さらにその木のいのちに対する敏感さは、一つの建築にたずさわる者同士が互いの心を感じる、その感じ方の敏感さと表裏してくる。

法隆寺はエンタシスの柱一本一本細かく測っているとどれも相当にちがう。斗の曲線でも垂木の太さもみんなちがう。現代とちがって一人一人が別々の仕事をするのだからちがうのが当たり前だが、その不揃いな部分を集めて見事な全体がつくりあげられてゆく。西岡さんはいふ。「全体として見ると統一がとれ、力強く、たくましく、またやわらかい感じすら出しています。これはえらいことです。おおぜいの大工の心がひとつになっていないと、あれはできません。

むかしの法隆寺大工が心をひとつにできたのは棟梁の統率力だけではない、お互いの心が通じ合い、結び合うような、信仰の対象があったからではないでしょうか」

評論家青山茂氏との対談の中でも西岡さんは同じことを次のように述べている。

「うちのじいさんから棟梁たる者は、人の心を組むということが大事や、心を組んではじめて木組みというものができると、やういわれましたけれども、そういう古い建物をこわしてみても、なるほどこれは一つの中心があつて、それにみんなが協調して、何十人かしらんけれども一つの人の心になつていふうに考えられますわな。その底に流れてあるものはなにかというと、やはり信仰心やないかと思えますわ。仏さんの御屋形を作り上げようという篤い篤い心でしような」『斑鳩の匠・宮大工三代』

「篤い篤い心」という言葉にはただならぬおもいがこもっているが、ここでいう信仰心の中心をなすものは、「法隆寺大工は太子の本流たる誇りを心奥にもて」という口伝があることからしても、聖徳太子に対する信仰であることは間違いない。

このような西岡さんの言葉は、単に閉ざされた職人の世界の言葉として懐古的に扱われるべきではなく、まさに日本文化論の中核を示す発言として味わうべきではあるまいか。